

1 自己評価及び外部評価結果 (※外部評価はユニット別ではなく事業所全体のものです)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3072500477		
法人名	有限会社 グループホーム開門荘		
事業所名	グループホーム開門荘	【ユニット名:開門荘】	
所在地	和歌山県新宮市熊野川町日足752番地		
自己評価作成日	平成24年3月5日	評価結果市町村受理日	平成24年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=3072500477&SCD=320&PCD=30
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人和歌山県認知症支援協会		
所在地	和歌山市四番丁52 ハラダビル2F		
訪問調査日	平成24年3月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

豊かな自然に恵まれた中にある当ホームは、木の優しさを取り入れた建物となっている。さらにウッドデッキから見える四季折々の景色が認知症の方にとってもよい影響を与えていると思っている。また職員もゆったりと時間の流れの中で穏やかに暮らしていただけるよう、相互になじみのある関係づくりとその人らしい生活をサポートしていく心がけている。地域との交流もあり、住民からの関心も高く、外出や散歩時に互いに挨拶ができる環境にある。増設により職員も増え、安定したサービスの質の確保をいかに図るか等の課題も多いが、明るく元気なホームを目指してがんばっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

田園を見下ろす静かな環境にある市内唯一のグループホームである。「感謝の心で共に生きる」の理念のもと地域での馴染みの関係を構築して入居者のホームでの暮らしを支えている。昔から近隣とつながりのある管理者の自宅が隣にあり地域での信頼も厚く、昨年の台風12号の際には甚大な被害を被る中、地域の人に助けられ、絆がより深まった。1ユニットが天井近くまで浸水し、浸水を免れたユニットでの共同生活のなかで、入居者を守るために今まで体験したことのない経験をしながら、管理者と職員一同前向きに再建に取り組んできた。12月末にはユニットが無事再開して、入居者や職員もやっと以前の生活のリズムを取り戻しつつある。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

(※外部評価はユニット別ではなく事業所全体のものです)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の中で、その人らしく暮らすことの大切さと支援する目的を含めた理念と信条をつくり、事業所内に掲示するとともに、理念と信条は毎朝の朝礼時に唱えるなど、日々の業務の中で管理者と職員が意識を高めるように取り組んでいる。	事業所の理念と4つの信条の中で「いつも感謝の心を持ちながら、愛の援助を行います」を特に大切にしながら、職員一同理念と信条それぞれ心に刻んでケアに取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所は自治会に加入し催事はもちろんのこと、地域の会議等々にも参加してホームへの理解や支援をお願いしている。また敬老会には地元の高齢者も招待するなど交流の機会を設けている。	地域での行事や催し、地域の「ふれあいサロン」への参加を通して地域とのつながり、住民との交流を図っている。台風12号の災害後地域の人との繋がりがより深まった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	昨年の台風災害時には、近所の方々にも避難の際に協力をいただいた。被災後も行政等の関係機関や地域の方々にも支援を受ける中で、認知症に関する説明をしてその度にご理解をいただいた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は開催回数を3回とし内容の充実を図っていたが、台風災害により秋に予定していた会議が開催できなかった。3月中旬に第2回の運営推進会議を開催し、災害に関するテーマで意見交換をする予定。	ホームの様子を知ってもらい、改善へと繋がる様に取り組んでいる。3月の会議では家族、市の担当者、社協、区長が参加して、台風12号の経験の中から、災害について活発な意見が出た。	参加者が気軽に集まり興味を持って意見交換できるよう工夫して回を重ねることが望まれる。会議を活用して地域からの期待に応えて行けることを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市役所の担当課へ直接出向いて連携を密にできるような心がけている。担当職員とは、電話やメールにより、迅速な情報共有が図れるようにしている。地域包括支援センター職員とも連携をとっており、希望があれば見学等にも対応している。	市の担当者や地域包括支援センター職員と情報のやり取りを密にしている。今回の災害で、当初支援物資等が中々届かなくて苦労し、市に何度もかけ合った事で、関係がより身近なものとなった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	管理者から朝礼時において、適時、身体拘束をしないケアに関する指導をおこなっている。また虐待に関する伝達研修や自主学習を実施した。	車椅子で過ごす時間が行動の制限に繋がらないかにも配慮している。職員とは常に話し合い、言葉による拘束にも気をつけ、入居者の気持になって考えるように伝えている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する国内での事故等の情報や行政期間等の指導内容を適時、朝礼で報告したり、職員用掲示板等にて掲示したりして虐待に関する意識啓発に取り組んでいる。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者・介護支援専門員・介護リーダー等には権利擁護に関する理解を持たせているが、全職員に対して制度の理解を周知させるまでには至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約及び解約時には、必要な書類のほか分かりやすいパンフレット等を用いて、利用者や家族に十分に納得していただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的又は必要時に家族へ連絡をとっており、その中で意見や苦情等があれば、迅速かつ丁寧な対応取れるように努めている。また家族の来訪が予定されている場合には、あらかじめ電話等により相談の内容を伝え、効率的に話し合いができるようにしている。	家族には来訪時に話を聞いている。訪問が少ない家族には電話で連絡するよう努め、家族の意向が聞けるよう配慮している。家族には担当者が定期的に手紙を書いて入居者の様子を伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例会議の中で、職員からの意見や提案があれば、積極的に申し出てもらうように伝えられている。また管理者が朝礼時や現場で職員と直接に話し合うことで、意見が言いやすい雰囲気作りにも努めている。	普段の話し合いやユニット会議、リーダー会議等の中で職員の意見を聞いている。イベントの開催等についてもアイデアを求め、企画内容が不十分なところは管理者とケアマネジャーが補っている。	職員が管理者やケアマネジャーに頼ってしまいがちにならないように、指導、育成し、多くの意見や提案を運営に反映していただけることを期待する。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善交付事業を機会に、職場環境や条件整備に取り組んでいる。正社員については経験年数や資格だけでなく、労働意欲や勤務態度も参考にして昇給させるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は認知症実践者研修に出席させたが、個人的な事情により修了できなかった。来年度は参加できるよう予定している。適時、内部研修を実施するほか自主研修についても希望に対応できるよう配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	本市には他に同業者がなく、実際に交流できる機会は少ない。管理者は県レベルの連絡会議には積極的に出席して情報共有できるよう努めている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族から離れる不安を理解し傾聴や受容等の相談援助に心がけるとともに、受け持ち職員が本人との馴染みの関係が早く構築できるように、寄り添って重点的に支援するようにしている。	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入荘にあたっては家族の困りごとやニーズを把握するための面談の機会や専用のアセスメントシートに記入してもらうなど、情報把握できる手段を多く持つようにしている。また入荘後も必要に応じて連絡を取り合えるよう協力をお願いしている。	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期は、本人の生活歴や言動に十分注意したり、家族との連携を図りながら、各症状に対する理解を深め、一日も早く落ち着いた時間が確保できるよう努めている。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本ホームの理念にも謳っているが、「感謝の心で共に生きる」という姿勢を忘れずに支援するよう努めている。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「感謝の心で共に生きる」という意味は、本人・家族・職員・地域によって構成されるので、家族と寄り添いながら本人を支援できるよう努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人・家族・関係者等からの聞き取りにより、本人が馴染みを感じている、人・物・出来事についてできるだけ多く把握するようにして支援時に生かすよう取り組んでいる。	入居前からの馴染みの関係の継続に努めると共に、入居してからの新しい馴染みの関係の構築についても大切に考え、周囲との繋がりが強まるよう取り組んでいる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の性格や嗜好によって、グループ化は避けられないが、職員が適時に声かけをしたり、散歩やレクリエーション等へのお誘いをするなどで、一人ひとりの尊厳を大切にしたい支援をおこなっている。	

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退荘時には家族へは、相談や悩み事があれば対応していくことを伝えている。退荘者の家族や親戚等から近況等についての連絡や手紙をいただくことがある。		
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族からの聞き取りや、普段の生活の中で入居者の言葉や様子から、一人ひとりの思いや暮らしの希望・意向を汲み取ろうと努めている。アセスメントも工夫して、具体的な支援ができるよう取り組んでいる。	入所時に用紙を渡して家族から詳しい入居者の情報を提供してもらい、若い時の生活歴も把握して今の様子と照らし合わせて、入居者の思いを汲み取るようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からの聞き取りにより、本人の生活史の中でこだわりのある人・物・出来事についてできるだけ多く把握するようにして支援時に生かすよう取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日頃の支援内容や処遇記録等から本人の心身状態の把握をするために、定例会議やミーティング等において意見交換やケース検討をおこなっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の希望を踏まえて、ケアマネジャーや介護リーダーが中心となってチームで話し合い、入居者がその人らしい生活がおくれるような計画を作成している。	担当職員を中心にアセスメントを行い、より入居者に合った計画づくりに努めている。介護計画は丁寧に作成されているが、アセスメント、計画、モニタリングの流れが見えにくいところがある。	計画の一連の流れを明確にし、根拠が明確になることで、日々のケアの中で、より活用できることに期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践等については、処遇記録や申し送り簿により記録している。ケアに関する相談は、適時、職員同志でおこなっており、必要に応じて上司の指示や定例会議で協議している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域性や事業規模等の課題はあるが、出来る範囲の中で、多様化するニーズに応えていきたいと考えている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事参加や地域住民との交流を通じて、近隣の方々と外出や散歩時に声を掛け合える関係づくりができるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望のかかりつけ医には、家族が受診介助しているが、必要に応じて職員が受診介助することもある。家族が送迎する場合は、職員があらかじめ記載したメモ等を活用してかかりつけ医に対して適切に情報が伝達できるように努めている。	事業所のオリジナルの情報提供書を作って入居者の様子を書き込み、毎回の受診の時に主治医に渡せるようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、看護師資格者が1名いる。必要に応じて、本人のかかりつけ医療機関に相談し指示をうけるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、定期的に訪問し、家族や看護師等から情報を得たりしている。地域医療室との連携がうまく図れるよう、適時、電話や訪問により関係作りに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所としてもソフト・ハードの両面から対応の困難さが想定される。入居時にあらかじめ家族等に説明をして、ホームとしてできることをご理解いただくとともに、家族の強い協力をお願いしている。	家族や主治医と連携しながら入居者にとって一番良い支援を行う方針である。現在のホームの環境のなかでは看取りの条件が整い難しく、医療が必要となると入院せざるを得ないのが現状である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時の連絡体制を掲示するほか、緊急時の対応マニュアルを周知させている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年は台風災害のため地域と合同避難訓練は実施できなかった。今回の被災経験を通じて職員全員が災害に対する意識が高まった。また救援活動を通じて行政機関をはじめ近隣住民や地元の消防団等との連携が強くなったと感じている。	台風12号の災害でホームの一つが浸水し地域が孤立状態となった。今回の被災で課題も明らかになり、地域の意識が高まり今後に向けての連携も強まった。	

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員については就業規則における服務規律及び個人情報保護の遵守を徹底するよう指導している。個人データは所定の場所に保管管理するよう指導している。職員に対しては居室におけるプライバシーの大切さを周知させている。	排泄、入浴の際には本人の気持ちに配慮して、必要な場合は介助者を同姓にしている。トイレへの声かけもさりげなくしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個人の認知症の症状や程度にもよるが、その人らしい生き方・考え方を尊重して親切丁寧な対応ができるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人らしさを尊重するとともに、思いや意向を大事にした支援ができるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしさを尊重するとともに、思いや意向を大事にした支援ができるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	配膳が調理ができる利用者は、職員と自然な形でおこなえるよう配慮している。昼食時は職員も一緒に食べながら、入居者と会話ができるような時間の確保と雰囲気づくりを大切にしている。	後片づけ等を手伝っている入居者もいるが、食事の準備に参加する入居者はあまりなく、多くの人はテーブルに座って運ばれるのを待っている。	準備や片付けが残存能力保持に繋がることが意識して、入居者の自信や意欲に繋がる様、一人ひとりの状況の中でできる事を見いだせることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べやすい大きさを配慮しながら、調理している。そして、それぞれの食べる量の配慮はもちろん、咀嚼力や飲み込み力に「応じて魚をほぐしたり刻んだり」と手を加えている。食事量も水分量も毎日チェックしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その人にあった口腔ケアのための声かけや支援、必要な場合は、入れ歯洗浄をおこなっている。		

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別の排尿チェック表を作成しては把握と対応に務めている。トイレへの誘導については、入居者の性格や言動を理解することで、個別に声かけや誘導をおこなっている。トイレで自立排泄できることの大切さを周知させている。	オムツを少なくする工夫をしている。リハビリパンツを利用している入居者が布パンツになったケースもある。トイレを汚すのが気になる入居者には本人の気持ちに配慮して支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを行い、便の状態や量も記録している。水分補給に注意を払い、便秘時にははちみつ、牛乳などの提供を心がけている。便秘がひどい場合は、家族と相談しかかりつけの医療機関への受診もおこなっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回程度の入浴をしている。入浴に際しては、本人の同意と納得を前提としている。入浴を拒否されてもシャワー浴や足浴で対応している。近くの温泉での入浴を勧めることもある。	災害時には、湧き水を汲んでドラム缶で湯を沸かし風呂場へ運ぶなどの工夫で乗り切ることができた。入浴の嫌いな入居者も抵抗無く利用できていた近くの温泉施設は災害以降復旧していないので利用できなくなった。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	出来るだけ安心、睡眠がとれるよう支援しているが、夜間眠れなかった場合は、ゆっくりと過ごしていただくよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の体調の変化や異変みられた時は、速やかに看護師に相談し、支持を仰いで対応している。必ず、記録し引き継ぎをおこなっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や出来ることをアセスメントし、話を聴きながら、職員で利用者様一人ひとりの張り合いや喜びのある日々を過ごせるよう話し合いながら、支援をおこなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出、外泊は本人の体調に問題のない限りは、いつでも可能である。散歩は希望される方を中心に、他の入居者へも参加を促している。ドライブを希望される時は、職員の勤務体制の関係もあるが、できるだけ対応できるよう心がけている。	災害前は近くの温泉施設等に散歩も兼ねて行っていた。隣のユニットに行く時も喫茶店風にして、気分転換出来る様に工夫している。少人数のドライブも行っている。	身体機能の低下で気軽に外出しにくい入居者に対しても、外出で体を動かしたり気分転換出来るような支援を期待する。

【事業所名】グループホーム開門荘 ユニット名：開門

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が所持できる人は自身が管理されている。そうでない人は、高額でない限りホームが立て替えている。購入物によっては家族と連絡をとりあい対応している。原則として買い物を希望されれば買える体制にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、随時行えるようにしている、手紙の投函の支援もおこなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は木の暖かさを意識して作っている。どの部屋も掃きだし窓で明るくて外気もよく入る。ウッドデッキも利用しやすく日光浴や自然の風を感じていただける。また景色もよくみえるので季節感を感じられ気分良い環境となっている。	共用空間が広く、明るく、窓から見える自然の景色に気持ちが癒される。テレビの前にはゆったりしたソファが置かれ、観葉植物もあり、寛いで過ごせる空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには、ソファ・テレビを置き、気の合う利用者同士で過ごせるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は自由につかって頂いている。できるだけ馴染みのある物を使用してもらうよう家族にもお願いしている。家族が宿泊を希望される場合には、寝具を借りることができる。	持ち込まれる物があまりない入居者にも、テレビや椅子など、好みに合った家具等を貸出して、その人らしい生活ができるよう支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーはもちろんのこと、トイレや洗面所は、一般家庭と同じような仕様とし、本人が在宅でいたようなイメージで暮らせるよう配慮している。		